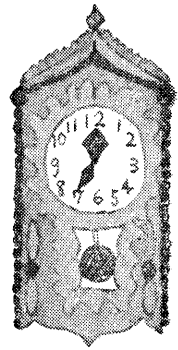


# 子どもの生きがい



山 野 光 映

児童科を卒業して十年余りの現在、六歳と三歳の二人の女の子の母親になりました。

子どもは自分で育てたいと、長女出産の前に、五年間の高校家庭科教師の職に終止符をうちました。そのころ「子どもは四人ぐらい、親は子どもがもって生まれた力でのびのび自然に成長するのを助けて……」などと思っていたのですが、いつの間にか、子どもの「ちょっとした行動に、喜んだり、心配したり、怒ったりの平々凡々たる親になってしまいました。

児童学を学んだものらしい注意深い観察や記録、分析、考察などからも縁遠くなりました。子どもの側に立って考えようという体制だけは保ちたいと努力してきました。がそれも泥んこ遊びで上から下までどろどろになった姿や、お友だちを大勢連れてきて、ちらかしきった部屋や庭、おもいがけないいたずらなどを見るたび（こうしたことが毎日なのですが）親と子の利

害はなんと相反するのだろうかと思いがでています。

そんな日々を過ごす中で子どもの生きがいなど考えたこともありませんでした。それで私にはとても書けませんとお断りするのが当然と思いましたが、この機会に子どもの生きがいについて考えてみることに、私と二人の子どもたちと新たな一面を作ってくれるのではと、何年ぶりの文章を書くことにしました。

## 楽しく遊べること

子どもの生活は遊びですから、遊びが楽しいこと・楽しく遊べるのが、最も自然に生きがいになるのではないのでしょうか。大人でいえば仕事が楽しい・楽しく仕事ができる・ということになると思います。

仕事と違い、遊びは楽しいのが当たり前だといわれそうです

が、私の子どもたちは、それぞれに楽しく遊ぶことがむずかしかったようです。

長女は、親に遊んでもらうことに慣れてしまい、自分一人で遊ぶこと・自分から遊びの仲間に入って行くことがへたでした。誘ってくれる人がいないとつまらなそうにぐずぐずしていました。また自分の家以外では小さくなって遊んでいました。お友だちの間で、自由に自分を發揮して遊びを楽しむようになったのは、幼稚園の年少組も終わりに近くなったころからです。そのころ寝る前によく「ああ、今日は楽しい日だったなあ」といいました。自分の力を思いきり出してお友だちと遊べたことが、快い満足感となって思い出されるのでしょうか。こちらが楽しくなるような満たされた顔でした。楽しく遊んで生きがいを充分に味わっていた姿のように思われます。

次女は遊びを見つけたのが上手です。長女やその友だちが妹の遊びに入れてもらうことがよくあります。友だちを自分の思うように動かす力も持っています。陽気でもいつも楽しそうに遊んでいます。

でもその楽しい遊びで毎日失敗しています。今日も、鏡台の前にお人形をならべ、その顔にいただきもので私が大切に使用していた化粧品をベタベタぬっては、金魚鉢の水で洗っていました。そのためか金魚が一匹浮いてしまっているのです、あわてて

水をとり変えると底から小さなおもちゃがたくさん出てきました。金魚さんのおもちゃにあげたといえます。(この金魚は前日金魚すくいで自分がかまえたものでした)

こんな時、「あら、礼ちゃん」というとまた悪いことをしてしまったと気づくらしく、小さくなってベソをかきます。楽しさは一度にふっとんでしまうようです。先日「おもしろいことは、みんなママにおられることだね」と長女にいつているのを聞き、苦笑しました。長時間楽しく遊んでも結果的に叱られていては、遊びの楽しさを味わって生きがいを感じるにはほど遠いことでしょう。

#### 両親や友だちから愛され認められること

長女が幼稚園に入って間もないころ、タイツをひどくやぶいて帰ってきました。ころんだのではなさそうなのできくと、「いすにすわっていつまらないからタイツをつまんでいるうちにやぶれてきた」といいます。動きまわることができず、じっといすにすわって下を向いている娘の姿が想像できました。よく〇〇ちゃんがいじめるともいいました。自分が使っている遊具でも、元気のよい子が取りにくればすぐあげてしまうという話も聞きました。幼稚園に行くことをいやがりこそしませんでした。家が、家ではおこりっばい子どもになりました。生きがいを失

っていた時だったとも考えられます。

夏休みが終わって、自分が作っていった紙芝居を先生がしてくださり、娘のクラスばかりでなく他のクラスにもまわり、みんな熱心に見てくれたというのを聞いてから、しばらくたったころ、「このごろ○○ちゃん、あたしのこといじめるのを忘れちゃったみたい。先生が紙芝居してくれたからかな」といっていました。

夏休みが終わったら何かおみやげを作って幼稚園に持ってくるようにいわれ、絵を書くことが大好きな娘は海行きのことを紙芝居にしたのです。それをお友だちが喜んで見てくれた——小さな体験でしたが、これで自信を持ちはじめたため、自分が変わっていったようです。お友だちの振舞いは本人が感じたほど変わらなかったのです。というのは、そのころ先生が、「最近元気に遊ぶようになって、初めてクラスの中でも勢力のある子とけんかしているのを見ました。言いほすことは今までなかったのですが」と話してくださいました。

一月のある日、ほほを紅潮させて、走って帰ってきました。おゆうぎ会で舌切雀をやり、おばあさん役に選ばれたのでした。みんなの推薦できめたようです。「先生が黒板に、みんなからいわれた人の名前を書いて、誰がいいか手を上げたら、あたしの時にあげた人がたくさんいたので、なるかな思ったら、

顔がどんどんあつくなっちゃった」とまだ興奮さめやらずの話しぶりでした。

本人が驚いたより親はもつと驚きました。元気になったとはいえ、やはり消極的なおとなしい子でしたから。それで夫とも心から喜び、ほめました。これが転機となって娘の世界はずいぶん広がっていきました。「あたしのこと好きなお友だちが多すぎて困っちゃう」とうれしそうに話しました。お友だちが自分を認めてくれたという自覚が、生き生きと活動的にして、その結果お友だちがいつそうふえたのでした。そんな姿を見て私も、ぐずで困ると思うことが多かったのを忘れ、顔まで以前よりかわいくなつたように思えてきました。親の気持ちを敏感にうけとめて、家でも目に見えてよいお姉さんになりました。

お友だちから、そして親から認められることが五歳の子にととって、こんなにもうれしく、こんなにも成長を助けてくれるものだということをしみじみ感じました。今でも幼稚園で一ばんうれしかったのは、たくさんお友だちが手をあげてくれた時だといえます。

### 自分の成長を確認して未来を夢みること

「ママ！見て！」なわとびができるようになった時、やつとさか上りができるようになった時、一メートルほど泳げるよう

になった時、してもっともっとさ細なあれこれができるようになるたび、喜々とした声に呼ばれます。次女はドイツがうまくはけたといつては、はねまわって喜びます。カルタを一枚とつては、びよんびよんといびはねます。その間に姉にたて続けに数枚とられても平気です。こわい犬の前を通り、自動車が走りぬける道をへいにびったりつきながら、はじめて一人でお友だちの家へ行き、帰ってきた時の喜びも数日前でした。成長の速度が早い幼児期は、こうした喜びに恵まれています。しかもいつも親がそばにいて、一緒に喜んでくれるのですから、うれしさも数倍です。とびはねたり、走りまわったり体ちゅうで喜びを表現します。

こうして自分の成長を自覚しながら、もっと大きくなった自分をいつも夢んでいます。長女はドレスを着たおよめさんの絵をよく書きます。すてきにかわいくかけると、それが自分です。そして幼稚園の先生になり広い芝生の庭があるお城みたいな家を建てるのだとはりきっています。散歩の折には場所まで物色しています。次女は「ご飯なんか食べなくていいわよ。お菓子をたくさん食べなさい」といい、子どもがおしっこをもらしたら、だまってとりかえてあげるやさしいママになるといつて私に抵抗します。

もっと現実的に長女は、近所の先輩たちに「学校ってきびし

いんだよ。宿題もあるし」などと、おどかされながらも入学を楽しみにしているし、次女は来る人ごとに「礼は、さ来年幼稚園」と幼稚園に行ける日をほこらしげに告げています。自分が大きくなって少しえらくなることへの期待と未知の世界に対する夢が実際の生活の中で体験するさまざまな喜びとともに、一つの生きがいとなるのではないでしょうか。

### 気ながに子どもの成長を待つ

子どもが生きがいを感じたであろうと思われることをいろいろと考えるのは楽しいことでした。子どもそのものが生きがいにあふれているような気がしてきました。けれど逆にあの時は生きがいをしぼませてしまったらうという思いも、はじめて子どもの生きがいについて考えてみて多々ありました。私の期待に子どもの行動がともなわなかった時のお説教の場面が思いおこされます。ゆったりとした気持ちで子どもの成長を待つあげようとならためて思いました。生きがいにつながるそうなきっかけを、上手にとらえてあげられるよう、努力しようと思っていました。